

論文審査の結果の要旨

論文提出者 平井太郎

論文題目 近代日本における資本主義と習俗の交錯 東京・日比谷から見通された土地と社会

本論文は、明治の開国期から昭和の高度成長の時期にいたる近代日本において、「資本主義とともにある生のかたち」がどのような論理のもとに展開していったのかを、歴史的な事象を通じて探求するものである。かつてマックス・ウェーバーは西欧においてこの種の問題系を考察していたが、本論文は、近代日本という歴史的なマテリアルにおいて、また資本主義の基本条件を次に掲げる二つの技術と捉え、それらの技術とのかかわりにおいて「資本主義とともにある生のかたち」がどのような過程を辿ったのかを考察している。

本論文はまず、①資本主義的なエートスを支える生のありようを、ミシェル・フーコーの「主体化」の論理に依拠し、反省と再構成を重ねながら自己の同一性をたえず問題化していく動態的な過程として捉える。次に、②ジャン・ボードリヤールを軸とする消費社会論に準拠して、人間＝主体という現実性の審級に視点が拘束されている主体化の論理を相対化する「複製技術」の作用とそれがもたらす現実性の変容の過程に注目する。そして近代日本の場合、産業資本主義の導入とともに、一方で主体的な自己の問題化を要求する「規律化の技術」と、他方でその主体化の現実性を相対化していく「複製技術」という、二つのベクトルが同時にほぼ並行して展開していった点に特徴があったと考えられる。

資本主義を支えるこの二つの技術が、土地と貨幣的な富を根拠として持続する「家」を根幹とした習俗の世界と交錯していく過程が本論文の基本的な分析対象となる。本論文によれば、柳田國男は習俗の同一性について、「人間の忘れやすさ」を先験的なモメントとし、現在と過去の照合によって一定の幅のもとにたえず再構成されるものと考えていた。しかしこの照合と再構成の仕方は、資本主義が貨幣的な富の流動性を高め、また規律化の技術や複製技術が入り込むことによって変容していく。この変容の具体的なプロセスのうちに「資本主

義とともにある生のかたち」が分節されていったと捉えるのである。

このような分析を遂行するうえで、本論文では、具体的な観察対象を東京・日比谷という場所で生じた出来事から見ていく「定点観測」の手法が用いられる。定点をとることは事象の歴史的な推移を捉えやすくする利点がある。また定点を土地にとるのは、習俗の基盤にある「家」の同一性が土地を介して思考されてきた経緯があるからである。そして東京・日比谷の地を選ぶのは、この研究が問題にしている規律化の技術や複製技術の働きを展望するうえで、日比谷という土地の来歴が戦略的に有効だと考えられるからである。

上記の枠組を踏まえ、本論文の第二章～第四章では、習俗、規律化、複製技術の歴史的な連関が分析され、本論文の基本的な構図が与えられる。まず第二章では、一九世紀後半の、日比谷大神宮の創設とその変容に注目し、伊勢信仰のうちに国家神道的な側面とは別に「現世利益」というモメントがあったこと、そしてこの伊勢信仰とのかかわりで村落共同体の習俗が貨幣・商品経済とそれに伴う投機的側面や流動的な過程と結びついていたことが明らかにされる。また、柳田國男の分析に拠りつつ、東北の木地屋が「複製技術」を入手したり、見物したり、また定住に到ったりと、その生活のかたちや現実性を変えていく経験に触れ、いわば滅びながらその同一性を獲得していく動的な過程に、習俗の論理の基本形を見いだすことになる。

第三章では、日比谷練兵場を起点として、軍事祭礼における天皇の振る舞いや位置に注目しつつ、「規律化」の技術が習俗にどう作用したのかが分析される。本論文は「規律化」の技術を、その規格化の働きを通じて雑多な群集を生み出し、かつその雑然さを問題化する装置と捉える。他方、習俗の動的な同一性はこうした問題化を自明としない。その意味で「規律化」の技術は習俗とは異なる。だが軍隊に見られるように、この時期の「規律化」は斉一性のイメージよりも、制御しがたい雑然とした現実を浮かび上がらせ、かえって習俗の想像力を活性化させる。その結果、現在と照合されるべき過去の問いなおしが促され、家郷のイメージや土地の同一性が新たに再合成されていったと考えられる。

第四章では、世紀転換期の都市における人々の生のありようが「複製技術」とのかかわりで捉えなおされる。日比谷焼打ち事件の群集が広義の「複製技術」の作用に媒介されて立ち現れたこと、また「複製技術」が広告技法において徐々に組織化されつつあったことが指摘される。こうした「複製技術」の浸透とそれに対する人々の慣れが、この時期の都市における生のありようを規定しており、焼打ち事件の群集もこの浸透と慣れを兆候的に示すと考えられる。この時期の広告技法では、過去との照合が過去を「伝統」のように固定的なイメージで合成するが、柳田によれば、都市祭礼の習俗では過去との照合は最終的にはその意味を確定しがたいものだった。「複製技術」の浸透はこうした意味の不確定性を見えにくくしていったとされるのである。

第五章以下では、以上の考察を踏まえ、「家」、「都市」（家庭）、「欲望」（個）という三つの問題系の交錯が分析の主題となる。まず第五章では、一九〇〇年の日比谷を起点とした「神前結婚」と新たな「家憲」の制定という二つの流行現象に注目し、この時期にかたちづくられた「家」の同一性について、それが貨幣的な富の蒐集を重要な根拠としていたことが分析される。ジンメルの貨幣論に依拠すれば、貨幣的な富に結びつけられた生の様式として「守銭奴」「浪費家」「土地貴族」といった類型が考えられるが、近代日本では「富の蒐集家」（守銭奴）しか現実感が与えられなかったのは、一神教の神や土地貴族における土地といった、貨幣的な富以外の超越的な価値基準が成立しなかったことがその背景にあるのではないかという解釈が示される。

第六章では、一九二三年の関東大震災からその復興へのプロセスに注目し、日比谷における新たな建築環境の出現や都市の「家庭」の規範意識が分析され、そこに消費社会変容の兆候が読み取られる。このプロセスは複製技術の効果が強まり、習俗が再編されていった過程でもある。習俗では不可欠だった過去との照合という現実性が後景化するとともに、貨幣と強く結びついた「家庭」という現実性が前景化していくからである。ここでは家庭を根拠づける貨幣的な富はシステムやモードによって規定されるものとなる。また、システムとモードの論理の浸透により、土地もまたその根拠としての性格を相対化されていく。それは生の意味づけが実質的に消失していくプロセスのはじまりであり、このような生を生きながらえ自己肯定する媒介として種々の娯楽やキッチュな文化が合成されるという。

第七章では、一九六〇年代の高度成長における人々の生の同一性をめぐる問題状況が日比谷で企画・制作された映画作品を通して分析される。映画「無責任」シリーズのレトリックが示唆するように、高度経済成長は、成長に対する根拠なき信憑のもとに達成されたものであり、この成長に不可欠だったのは高い消費と貯蓄の源泉である「家庭」であったという。この「家庭」は貨幣的な富を根拠とする流動的な単位であり、経済成長とつながることで持続する。この時代の人々は「家庭」という不確かな同一性のうちに充足していく生を営んだが、この「家庭」への帰属は、「家」の世代的な連続性の感覚を失わせるものではなく、また自分が異常な「個」ではないという感覚を保証したともいえる。この意味で「家庭」という人間の同一性を測る基準は、その自明性に揺らぎを抱えた「家」や「個」という価値基準と奇妙なかたちで並存していたとされるのである。

以上が本論文の構図であるが、その独自の学術的な価値として次の諸点をあげることができよう。第一に、本論文は、近代日本における習俗の現実に焦点を当て、柳田國男に依拠しながら、その論理構造について独自の仮説モデルを提示し、習俗が再編され、相対化されていく歴史的なプロセスを展望しつつ、個々の事象に即してこのプロセスの屈曲を捉えている点で高く評価でき、歴史社会学的な文脈においても貴重な貢献になっているといえよう。第二に、資本主義の作用を「規律化」の技術と「複製技術」という二つの側面から捉えること

により、資本主義と習俗のかかわりを多様な社会的現実性の場で照準し、記述し、分析した点でも、本論文は高く評価できる。「規律化」と「複製技術」という分析視点を取ることで、習俗の現実へより具体的に内在するかたちで、習俗と資本主義との作用連関が捉えられたといえよう。第三に、本論文は、資本主義の作用が習俗の現実を一方的に崩していくという近代化にかんする単線的な理解の図式に陥らず、近代的な「規律化」の技術の導入がかえって習俗の想像力を刺激し活性化する局面を指摘するなど、規律化と習俗が交錯しながら生の同一性のありようが再編されていく相互的な奥行きのある過程を取り出している点でも評価できる。第四に、本論文は、同じように資本主義を支える技術でも「複製技術」は「規律化」がはらむ人間的な現実の主体化の論理を相対化していくという消費社会論的な展望に留意することにより、同一性の再構成において「複製技術」が「規律化」の技術を強めたり、あるいは二次的なものにしたたりする複雑な過程を視野に収めており、資本主義の作用を複眼的に捉えた点でも高く評価できるといえよう。これらの成果を通じて、本論文は、社会科学が従来、十分に扱えてこなかった都市の土地性を捉える新たな視点を提供しており、関連社会科学的にも意義深い。

他方、本論文には次のような問題点も残されている。第一に、「動的な同一性」の概念や、「規律化」「複製技術」といった近代性を包括的に標示する概念を含む、理論枠組の抽象度が高く、そのため歴史事象の記述・分析の水準とのあいだにやや距離が感じられるので、両者の照合関係をより明瞭に媒介する中間的な理論水準の整備をはかる必要があるだろう。第二に、習俗を取り出す思考がはらんでいた天皇制国家という同一性や、また「規律化」や「複製技術」の作用を取り出す際の母体として資本主義という同一性が大枠に前提されており、こうした前提の相対化に達することが望まれる。第三に、日本に移入された初期の「規律化」がその外観のもとに隙間や骨抜きがあったのではないかという疑問やその歴史性を吟味する必要がある。「規律化」は権力の政治技術であり、その働き方については近世社会の言説や空間を配分する権力技術との関係もある程度見定めておく必要があるだろう。第四に、「複製技術」をはじめとして曖昧さの残る概念の調整を行い、またときにレトリカルな表現をより簡潔な記述に改めれば、さらにわかりやすい叙述になったといえよう。

しかしながら、これらの問題点は本論文の学術的な価値から見れば部分的なものか、もしくはその業績をさらなる発展の可能性に結びつける課題であって、本論文全体の独自の学術的価値の高さを損なうものではない。したがって、本審査委員会は、本論文を、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。